ひとりひとりの子どもを見つめて ⑩

赤羽美代子

ある朝のこと「シェンチェイ（先生）、ブーメランを折って」と、三歳児のH夫が、折り紙を一枚持って、私の所にやってきた。不覚にも、私はブーメランとは、テレビに出てくる怪獣の名前かな？　と考えた。

「ブーメランって、なあに？」

「あのね、あのね、F夫ちゃんが持ってるあれ！」

指さす方を見ると園庭の真中で、五歳児のF夫が、折り紙で折った手裏剣を（星型）、ヒュッ、ヒュッと飛ばしている。F夫が飛ばす手裏剣は、クルクルと、見事に飛んでいる。

私はH夫に「ああ、手裏剣のことね？」と聞いてみた。

「ううん、違うよ。ブーメランだよ」

「あの、お星様みたいな、あれでしょう？」

「違う。お星様じゃないの。ブーメランなの」

仕方なく、側を通りかかった五歳児Dに、小さな声で「ブーメランって、空を飛ぶ怪獣の名前？」

Dは「えーっ！」

私は、慌てて「手裏剣の事かな？」

「うん、まあね。先生僕にも、ブーメラン折ってよ」

「僕の方が先だもん」と、H夫は憤然と、小さい身体に力を入れて、五歳児のDを押しのける。

「ブーメランは、折り紙が二枚いるのよ」と、私は、H

夫にいう。

「うん。シェンチェイ、僕が一番だよ。場所、とっててね」三歳児のH夫は、顔を、きゅうっと前にのばして、自分では、とっても早く馳けているつもりらしいが、ペタペタと馳けて行った。

H夫が黄色の折り紙を持って帰って来た時には、既に、四・五名の子どもたちが、折り紙を持って、手裏剣作りの順番を待っている。

私は、H夫から折り紙を受けとりながら「今から作るブーメラン（手裏剣）は、魔法の息を掛けますから、よーく飛びますよ。チチンプイのプイのプイプイプイ！」と、いいながら、フーフーと息を吹き掛けた。

順番を待つ子どもが増えてきたので、できるだけ早めに、H夫の手裏剣を折り上げたいと、私は、せこせこと指を動かした。

「さあー、できましたよ。H夫ちゃんのブーメランは遠くへ、遠くへ、飛んで行きますよ」と、大事そうに、H夫の手のひらに、そっと乗せた。後方で、順番を待っている子どもたちは「あっ、いいな。いいな」と、羨ましそうに、H夫の手裏剣を見守っている。H夫は、長い間、待たされた甲斐があったのか、ニコニコと笑いながら折り上がったばかりの手裏剣を眺めている。

だが、H夫は、急に「これ、Dちゃんにあげる！」といって、すぐ後ろに立っているDに、その手裏剣を渡す。突然なH夫の行動に、私もDも、少々、驚いた。あんなに、ブーメランができ上がるのを、楽しみに待っていた筈のH夫なのに……。

「H夫ちゃん、これ、あの木の天辺迄、飛ぶかも知れない、よーく飛ぶ、ブーメランなのよ」

「うん。でもね、これ、Dちゃんにあげるの」

「えー？　僕に？」

「じゃ、シェンチェイにあげる。だからね、もう一つ作って！」と、真剣に私に頼む。

私は、H夫に嫌われてしまったブーメランを、少々、情ない思いで、じーっと眺めると、真中の折り目に、折り紙の裏の、白色がちょっとはみ出て見え、あまり、奇麗に折れていない。「あーあ、これだな！」と、私は気がついた。

「Hちゃんが、いらないのなら、僕、欲しいな」と、幸いにも、貰い手が出たので、H夫は喜んでYに渡す。

二個めのH夫の、ブーメランは、心をこめて、丁寧に折

った。H夫は、今度は、一目見て気に入ったらしく、ニッコと笑って、満足そうに「ありがとう」といい、スキップらしい足どりで馳けて行った。

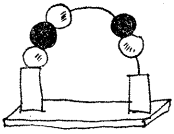
私は、手裏剣の目的は、ただ、少しでも遠くへ飛ぶ事にあるのだと思い込み、そして、子どもたちの目的も、そこにあるのだと考えていたようである。「これは、よく飛ぶのよ」と、誤魔化しのことばで、少々〃へなちょこブーメラン〃でも、子どもたちに許してもらえるものと思い込んでいた。

だが、三歳児のH夫には、良く飛ぶブーメランなどは、問題外であったらしい。奇麗に折られたブーメランは、H夫の手の中に有りながら、H夫の心を乗せて、無限な遊びの世界に、連れて行ってくれるらしい。

もう既に、H夫の心は、ブーメランに乗って、飛び立って行った。H夫は、三歳児のK子やM子が遊んでいる所に行って、両手に挾んで、暖めているブーメランを、K子とM子にそっと、手の中を覗かせるように見せては、ニコニコと笑っている。K子・M子も、H夫の手もとを覗き込んでは、三人で、顔を見合わせ、クスクスと笑っている。

私は、現実に目を奪われて、手裏剣は飛ばせて遊ぶ物。そして、できるだけ遠くに飛べるようにと、その事のみを考えていた。まことに、デリカシーの欠けた教師であった。

H夫が、自分の両の手のひらで、ブーメランをそっと包んだ途端に、そのブーメランは、H夫の夢がいっぱいに乗った、大きな翼に替わってしまった。遊びの世界に、クルクルと飛んで行く、〃ハート〃を持った、三歳児・H夫であった。

その時、私とH夫との間には、天と地と程の、ずれがあった事を、痛い程、感じた時間であった。

（霊南坂幼稚園）